

# 研修報告 日本史サマーセミナー

柏陽高校 矢野 慎一

毎年恒例の日本史サマーセミナーが、8月22日（水）と23日（木）の二日間の日程で、県立柏陽高校を会場として開かれました。今年の講義内容と講師は次の通りです。

8月22日（水）

講義Ⅰ「日本の産業革命」 同志社大学 児玉 祥一

講義Ⅱ「昭和恐慌史」 逗子開成中学・高等学校 杉山 登

8月23日（木）

講義Ⅰ「糸の近代史～製糸と紡績」 神奈川県立柏陽高等学校 矢野 慎一

講義Ⅱ「松方財政」 神奈川県立柏陽高等学校 渡辺 研悟

柏陽高校の生徒を中心とする20名ほどの受講者と、県内高校教員が約20名参加されました。両日とも午後は研究会が開かれ熱心な研究協議が行われました。

当日、授業に使用した資料の一部を以下に掲載します。

## 糸の近代史 まとめシート

開港とその影響（教科書 p 230～231）

①外国との貿易（1859年）

○横浜（神奈川）・長崎・箱館の3港で開始

○（1 ）貿易～外国商人と日本商人（売込商・引取商）

○横浜港中心・対イギリス貿易が全体の80%以上

【問】開港当初、貿易相手国がアメリカではなくイギリスが中心であった理由を答えよ。

【資料】 生糸の輸出相手国の変遷とその理由

開港当初、日本からの生糸の輸出相手国は、イギリスとフランスであった。ところが、英仏通商条約（1860年）により、自由貿易主義がヨーロッパの貿易の主流となるにつれ、その結果としてイギリスの絹織物産業が壊滅し、アメリカ絹織物産業が発達することになる。1884（明治17）年以降、アメリカへの生糸輸出量が英仏を逆転し、さらに明治40年代には日本の生糸輸出量の70%以上がアメリカへ輸出されるようになった。以後、大正期から昭和期を通じてアメリカが主たる生糸輸出相手国となったのである。

○貿易品

◆輸出品～（2 ）・（3 ）・蚕卵紙（蚕紙）・海産物

◆輸入品～毛織物・（4 ）・武器・艦船・綿糸

**【資料】 蚕卵紙（さんらんし）（蚕紙）**

蚕紙とは、蚕の卵である蚕種が産み付けられた紙を指す。専門の蚕種製造業者によって製造される。幕末の日本における生糸の輸出規制の抜け道として蚕紙の欧米への輸出が盛んに行われた。また、この頃に病気の蔓延によって蚕が壊滅的な被害を受けたフランスに対して日本の江戸幕府から蚕紙の緊急援助も行われている。

②開港による経済の混乱

○国内産業の変化

◆絹織物業

生糸の生産拡大＝輸出商品

原料生糸の不足＝国内絹織物生産地の混乱

◆綿織物業

安価な外国産綿織物の大量輸入→国内の綿作・綿織物業の圧迫 ←本当か？

**【考察】 外国産綿織物の大量輸入は、国内の綿作・綿織物業を圧迫したか？**

**【資料】 日本綿布とイギリス綿布の品質の相違**

当時、日本綿布とイギリス綿布の国内市場における競合関係になかった。それは両者の使用価値（品質・用途）が異なっていたからである。イギリス綿布の品質はいわば夏物といってよい薄地で、それに対し日本綿布は堅牢で、冬の寒さを防ぐ厚地であった。日本綿布が労働着、普段着の衣料であったのに対し、イギリス綿布はその多くが絹織物の下級代替材として、着物の裏地に用いられた。また、価格も日本綿布がイギリス綿布を上回っており、日本人は価格の高い日本綿布を購入したのである。

○（5）（1860年）

◆江戸の間屋商人保護のため

◆雑穀・水油・蠟・呉服・生糸の統制

◆在郷商人・外国人貿易商の反対で失敗

③影響

○物価の上昇→庶民の生活圧迫

○攘夷運動の激化